

# 私の戦争体験



**いずみ**

発行所  
大阪いずみ市民生活協同組合  
堺市百舌鳥赤畑町1-8-4  
TEL 0722(52)2232(代)  
発行責任者 川島利雄  
編集 機関紙委員会

1979年8月

**特集号**

### いのちの極限を さまよつて

小山房江  
(東北支部)



それは大変な戦争でした。無謀なこの戦争を遂行するために、大きな消耗が強いられて、人的、物的の資源は底をつき、国の中は女や、子供や、老人が国を守り、軍需品や生活品の生産にはげんでいました。

私はその頃は病院の看護婦の一年生でした。

昭和二十年七月十日の未明から始まった堺の空襲は、四時間の後には一面の焼野原となっていました。私達は燃え上がる病院を守り、入院患者の救出に必死でした。日が昇って焼け落ちた病院と、広場へ運び出して助けた患者を見て、ただ呆然としていました。

それから後は三国高校(当時堺中学校)を仮救護所として、負傷者を受容し、患者を運び回して手当することになりました。しかし薬がありません。傷に塗る薬も、飲ませる薬も。そのため死をなくしていい人が続々と死んでいきました。その時の医者も看護婦も、その人達に何もし



爆撃跡の堺東駅付近(昭和20年10月) 堺市発行「復興のあゆみ」より

てやれないくやしさに、ボロボロと涙を流して患者にあやまったものでした。水道が出なくなりました。飲む水も、患者を清掃するための水も、学校からはなれた、三国牧場からもらって来なければ

なりません。ろくに食事にありつけず、ふらつく足をふみしめて重い水の入ったバケツを両手にぶらさけて、歩くつらさは想像も出来ないつらいものです。そんな或る日、先報と2人で水運びの最中に、敵の戦闘機が襲いかかりました。その方は私をつき飛ばして、機銃弾より助けてくれましたが、その方自身は弾に当たって死んでしまわれました。

食糧がなくなりました。四日坊もはなれた堺北警察まで飯盆を持って、食料をもらいに行きました。履物もない素足で毎日三度三度運ぶつらさ、そしてせつかく運んだ食事は少いので私達の口に入らず、二日も三日も絶食したものです。そのため、空腹にたえかねて畑のキュウリや、ナスを取って食べた事もありました。

こんな話はもう昔話となりました。過ぎた苦しさは、懐しい思い出になるといいますが、しかし、私達の経験は、命の極限をさまよった苦しさ、そして悲しさは、懐しい思い出とはならないでしょう。

#### 〔堺空襲〕

「突如としてB29数機は大坂湾上より堺市の南西に侵入し、東北方に向けて斜めに疾風の如く通過しながら焼夷弾の雨を降らし、瞬時にして大浜、龍神、宿院一帯は猛火に包まれたのであ

る。……親は子を求め、子は親を呼

び、兄弟、妻子互に肉親を採り合つて、悲叫昇泣、誠に阿鼻叫喚の焦熱地獄……呪うべき空襲は東天ようやく白みかかる頃止んだ。しかも晩間の中におぼろげに浮かび上ったのは一万七千余戸を焼き、千八百余の生霊を犠牲にした荒涼二十万六千余坪の焦土の都市の姿であった。余烟はなお煙り続け、翌十一日夜に到つても、暗夜に青い鬼火はあちこちに点滅していた。」(堺市

#### 副施行七十年誌より)

堺市への空襲は、昭和二十年三月十三日、六月十五日、六月二十六日、七月十日の四日におよんだが、第四次の爆撃はB29七十機の大編隊で、一夜で旧市内の八割が破壊された。  
被害総数は、死者千八百七十六人、負傷者千五百五十五人、焼失・破壊家屋一万七千九百八十九戸、被災者数六万二千四百四十人。(数字は前掲誌より)

### 拾った菓子

小林武子  
(向ヶ丘支部)



生協のおいしい食べ物を買った。きながら、ふと、戦中・戦後の物のない時代を思い出した。あのいまわしい思い出、終戦は、私の小学一年生の夏であった。

小学校の昼食時になって、必ず、何人かが騒ぎ出す。弁当がなくなつたと。体操の時間教室に残った友が騒われ、その時の先生の困った顔を今でもはっきり思い出す。「はくではない」「わたしではな

い」誰が食べたにせよ、一体これは、誰の責任であろう。育ち盛りの子供の飢が、他人の物は取ってはいけない、というわがききったことを破ってしまった。

もんべんに防空頭巾、虱(しらみ)だらけの頭髪で、石鹼のない風呂に入る。そんなことより何より私は、悲しく思い出す事が一つある。

これである。進駐軍の人達の投げたくれた菓子のことである。

三三五五、子供達は誘い合つて、進駐軍の来た事を合図をし、集るのである。私の生れは岡山県の田舎である。高梁川の堤防に、その入達はフープで来た。堤防の上の方より下方に向つて、チューイングガムやチョコレートを投げるのである。子供達はそれを懸命に拾って食べた。速

くへ投げたり近くへ隠したり、その光景は、人間と人間ではない。腐りかけの蒸し芋、かぼちゃの種、水ばかりの麦粥、その様を物じかない時代、拾った菓子のおいしさは、今でも忘れられない。でも、母にはひどく叱られた。武士は食わねど高擲枝、戦争に負けても、精神まで腐ってはいけない。叱られても叱られても、隠れて行った。嘘もついた。川へ水あびに行く」といって、また拾った、お腹がすいていた。恥も外聞もない。

勿論、戦地に行つて亡くなられた方々の苦勞や犠牲の大きさは、私の如き文章力では表わすことは出来まい。もっと、もっと、苦しい方々の多くいらっしゃる

事は……。でも、もう二度とあつてはならない、戦争は。永久の平和を願いたい。未来の辞書には戦争という字が削られることを願いたい。今日も、生協のあの音楽つきトラックが来た。こんな平和な日本があがたい。

### 泣くことさえも忘れて

岡本記代子  
(狭山支部)



昭和二十年三月、大阪大空襲、市内玉出は、みるみるうちに町の西半分は火の海となり、火の粉と、ほのおを避けながら住吉公園へといそいだ。途中、五歳の弟と、十九歳のおばの姿をうしなひ、見つけた時は二人とも胸から下が黒こげの哀れな姿だった。悲しみとおどろきで、泣くことすら忘れ立ちすくんだあの時の気持は、一生忘れられない。母もまた、ひざから下の大負傷で、病院へのバスにつみこまれた。つづいて乗ろうとした私の頭上で「子どもはだめだ

め」と一緒に連れていかなくては、他に身寄りの者がいませんから」おばの必死の言葉で母とひき裂かれることなく、無事病院につき、そこではじめて防空頭巾がやけ、頭髪がこげ、額にやけどをしていたのに気付き、おどろきと、痛さと、安堵感で大声をあげて泣いたのを覚えている。数日病院にいたが、やけども軽く、私はひとり父の生家である姫路にひきとられた。六月に入って、母と一歳の弟とおばが大阪からやって来た翌日、また城下町も、



ボール爆弾で傷ついたベトナム戦争下の子供たち

火の海となった。火が地面を這ってやってくる。まだ身動きの出来ない母は「私はいから子ども達をお願いします」と、火の粉とほのおに包み込まれようとしている。屋内で叫んでいるのを、おじがひきずるようにして、リヤカーに積み、ほのおの中を二家族十人は逃げはじめたが、とても歩ける状態でなく、途中、橋の下へと避難した。そこにはすでに多くの人がひしめき合っていた。大やけどで苦しむうめいている人、恐怖からのがれようと念仏を唱える人、身体の熱気をはらおうと衣服をぬぎ、川の水にひたし、それを身にベタベタとおしあてている人、いろいろな恐ろしい気配だった。でも、子どもの泣き声は耳にしなかった。泣くことよりもまず、息をしなくては死んでしまうという気持が小学校一年生だった私にも、ひしひしと感じられた。

焼けこげた衣服を身につけ、泣くことも忘れて走るベトナムの子どもの写真が大きく報道されたことがありました。あれは遠い国の出来事ではないのです。三十数年前、日本でも、もつと悲惨な目にあつた人が多くいます。私のこの体験などもまだまだ、なまやさしいものでしょうが、少しでも知ってもらえればと思いいんをとりました。——いつまでも、子どもが安心して、大声で親の胸の中で泣ける世の中でありませうように。

### ひじの命

福井陽子  
(向ヶ丘支部)



私がちようど小学校一年生の時の事でした。「空襲警報発令」のサイレンに、学校から逃げ帰り、また夜はサイレンによって起こされ、防空頭巾をかむり、防空壕にと駆けこむ恐怖の日が何日あつたでしょう。

昭和二十年、ウーウウー、空襲のサイレン、それは夜でした。「空襲警報発令」の声に飛び起き、身支度をととのえ、父母は家を守り、兄は祖父の手を引き、私は祖母の手をしっかりと握り防空壕へ。束になつて落ちてくる焼夷弾。ゾボゾボ。防空壕も危険と、祖母の手を引っぱって田んぼに逃げた。飛行機の爆音、投下される焼夷弾、身を守るため祖母と逃げた。雨の如く降り落ちる焼夷弾、燃える燃える、焼ける焼ける。田んぼの中を逃げころびまた走る。田んぼのどろに足をとられ四つばいになる。空を見上げ、「ああ、あぶない」、体から少しばかり離れ、焼夷弾がゾボウー。熱い、痛い、怖い、苦しい、死だ。焼夷弾に当たるまい

と、祖母と二人どれほど逃げまどい、苦しんだか。B29が私達を、苛めるだけ苛めてその上空を去つた。気が付いた時には、田んぼの中で祖母の腰紐をしっかりと握っていた。生きていて良かったと思ふより、あまりの恐ろしさ怖さに体が動かなくなつたものです。

ひしひしとせまる食料難、のどのえぐいぬか団子を食べた時、にがい草パンを食べた日、豚の餌である豆かすを美味しいと食べ、田んぼに飛びかうイナゴを袋一杯とり、また針と糸でイナゴの頭をつきさし、夜のおかづに持ち帰りました。フライパンで焼き、頭ごと食べる、ただ一品のおかず。家族そろつての畑の耕し、草引き、作物の出来る日を手を合せて待ちました。今日も、さつま芋の食事、明日は、かぼちゃの食事、おやつもさつま芋と、そんな食生活が何年も続きました。満州から引き揚げて来た伯父さんに貰つた白いカンパン、美味しかった。進駐軍で働いていた従兄に貰つたソーセージとフルトの美味しかったこと、この世の中にこんな美味しい物があつたのかと。私のこの一つの命を育てあげたのにも、両親とそして祖母の大きな力、大変な苦勞があつたればこそと、感謝しております。今の子供達は大変に幸せです。満ちた生活に感謝して生きなければなりません。今こんな幸福な生活が出来ます

のも、戦争で沢山の方々の犠牲の上にある事を、私達は忘れてはならないと思ひます。生あるかぎり、みんな平和に生き貫きたいものです。

### 25歳で初めて見た祖国の山河

川西節子  
(白鷺支部)



私の母は満州の大連の引揚げ者です。母に引揚げの様子を語ってもらいました。

三月一日の結集、と隣組から通知を受けた。私はその日にあわせて食糧を残しリュックサックに入れる。身の回りの品も整えていた。明日、二月二十六日午前九時、小学校に集結と命令が下つた。夜通しかかつて出発の用意を始めた。収容所では、食物が十分に与えられないからと、大切に残しておいた白米を炊いて、オニギリを作つた。内地には塩がない、とデマが広がっていた。

雑のうに塩とカンパンを入れたが、私は丁度妊娠九カ月なので、脱脂綿、ガーゼー、産着、オシメなど大切な品は出産の用意であつた。途中で産まれるかも知

れない。いろいろと未練のある品物も、涙をのんで残して、二十五歳まで育った家を出た。小学校までかなり道程があり、リュックが肩に食い込んでこれから先が思いやられた。

トラックに乗り、元関東軍の兵舎に収容された。やはり一日早い集結はまちがいであったらしく、夜になっても兵舎に入れてもらえなかった。地面は雪と氷の結氷期で、零下十何度まで下がる寒空の下、全員ひとかたまりになり、まんじりともせず夜明けを待った。せつかく持ってきたオニギリは、凍って食べられなかった。ようやく入れてもらった収容所は、板の上に毛布一枚敷いてあった。まわりは有刺鉄線が張ってあった。

二日後、いよいよ帰国である。大連港は東洋一を誇る不凍港、自由貿易港、そして大陸の玄関口。もう二度と訪れる日はあるまい。大連で生まれた私にとつて、夫の故郷は未知の土地。そこで一体どんな生活が始まるのだろうか……。引揚船は元貨物船で、船底につめ込まれた。何をすることもなく、考えることもなく、食事の時間がくれば食器を持って並び、大根の沢山入った雑炊を食べ、船酔いに耐える毎日だった。大連港を出て数日しか経っていないのに、佐世保の針尾島はもう美しい早春だった。

戦後、大連は、日本人が日本人を苦し

めた。俄か作りの「日本人労働組合」が難民救済に名を借り、かつての資本家や財閥を次つぎと人民裁判にかけて、金をしぼりとつていった。引揚船の中で、かれらが乗客からしつぱ返しにいい、あやうく海にほうり込まれるのを船長のとりなしで助かった。

私は船着場から収容所まで先頭近くを歩いてきた。大きなお腹をつきだし、リュックを背に両脇に雑のうをかけて歩く私に、誰一人用心しろ、大丈夫かとも声をかけてくれる人はいなかった。他人の事などかまわっている余裕がなかった。だるい足を引きずり、トボトボ山を越えた。いつの間にか、私が一番最後であった。何とあれな、こっけいな姿だろう。親はこんな娘の姿をまともに眺めておれないだろう。

かつて平和な大連での生活、ヤマトホテルの大広間で、ピアノの発表会で弾いた「春のささやき」、訪問者を着てお点前をしたお茶会、あの時の私も今の私も同じ私なのだろうか……。昔の私をすべて玄海灘に捨てて帰った苦なのだ。今歩いている私は、無一物から第一歩を踏み出しているんだよ。がんばれ、お腹の子供の分までガンバレ、そして将来叶えられるならもう一度、この山道を越えてみよう。そんな日が来るかも知れないと思った。岩清水がチヨロチヨロと流れていた。

どうせおくれついでに休みしよう。雑のうからカンパンを出してかじった。水は冷たかった。私が内地で最初にのんだ、おいしい水であった。

### 戦争を知らない私だけ

藤井光子  
(全開支部)



昭和二十三年生まれの私達の世代は、終戦直後の戦争の落し子、いわゆる「ベビーブーム」時代である。お陰で、ゆりかごから墓場まで競争……。などと云われて育ってきたけれど、特に、田舎で育ったせいもあるのか、戦争の直接的な恐怖とか飢餓とかは知らずに育ったので、戦争の事を書くなどと、おこがましい事なのですが――。

私の父親は戦争に参加していましたが、今、考えてみても何一つとして、戦争体験など話してもらった事がないように思います。母親からもそういった記憶がないし、何だか寂しいような気がします。主人の方は、間接的にですが戦争の犠牲者といえるかもしれません。

(彼の)父親が、戦争以来、病気がか

かられた事から彼の苦勞が始まる。母親が去り、父が去り、孤立無縁の寂しい境遇に至り、若い貧乏な彼は、大変だったらしい。

ある時、私の父親と戦争の話になり、どういう成り行きか、彼は、「お義父さん達の為に敗戦になったのや」というような事を言った。「東条英機や」とか父は言っていたが、行きたくもない戦地に行かされ、苦い経験を胸に刻んでいる人、よくそんな事が言えるナ、と思った記憶がある。お互い戦争という十字架を、薄れながらも背負っているのかもしれない。戦争の話など、直接聞かせてもらっていないけれど、かつて、裸同士で命をばりあった戦友とのつきあいをみていれば、なんとなくだけ、わかる気がする。

高度成長などと、物の豊富な中で育つ



映画「ガラスのうさぎ」より

### 戦争はそんなすだけ

頼田 翠  
(白鷺支部)



てきた世代にかわりつつある今日、戦争を知る事ができるのは、体験談とかマスコミなどからしかないと、戦争は二度と起こしてはいけないという事だけは、個々肝に命じなければいけないと思えます。

小学校三、四年の頃からだだったと思います。大阪の御堂筋が出来た頃で、今の船場センタービルの所、南御堂の西側に大踏さんという下駄の鼻緒の卸屋があり、その前に学校の椅子の座布団を敷き、座って並ぶのです。皇室の方、軍関係の偉い方が通られるのです。最敬礼の号令のもと頭を下げます。今度頭を上げた時は、自動車ははるか遠くへ行ってしまうので、どの様な人が乗って居られたのかわかりません。小学生ばかりではなく、一般の人達も一辨に御堂筋で土下座させられていたのです。これが昭和八年頃だったのでしょうか。

この頃より小学生の私にも統制、統制

という言葉を目にする様になり、船場の問屋の店先がだんだんさびれていったのです。そして支那事変、大東亜戦争……昭和二十年八月の終戦となったのです。女学校への通学も、馬場町の憲兵隊、師団司令部も、なんとなくおもしろくなくなっていき、市電、片町線（京橋）も、砲兵工廠等の夜勤明けの疲れ切った工具さん等がいっぱい、ギョウギユウの電車通学でした。鉄砲を持つての軍事教練、弾薬庫での弾丸みがき、糧原神宮へのモッコの土はこびなど、女専へ行つてからも勤勞奉仕のほか、兵隊さんの下着の上下、木綿のゴツゴツを手縫で何枚も何枚も縫いました。ミシンが有るのにどうして手縫でさせられたのか、今だに納得がいきません。勉強も天皇中心の歴史、文字も古典物ばかり、天皇のおんための戦争、「しこのみため」となる事のみ教え込まれました。

昭和十九年結婚。二十年二月の大阪大空襲で、港区市岡で、父母が難儀して集めてくれた結婚の衣料、道具全部が灰になりました。ちょうど妊娠三カ月、まだ真黒な煙の中、市岡より野里の主人の工場まで歩きました。途中、黒くけで炭のようになった死体が、沢山ころがっていたのですが、主人が私に見せない様にして、半日がかりで歩きました。またその足で淀川をわたり、二国の主人の両親の

家まで真黒すすだらけになって歩きました。

ここでの二十日間（両親等が奈良に疎開するまで）なんとも言い様のない、死以上の毎日でした。つわりはひどいし、食べ物、着る物、なんにも無い、あんないやな思い……。人の心のみにくさというのでしようか。この二十日間は、戦争のために人と人とのいやなあらしの場でした。物の無いことの心のすさびというのでしようか。食べ物のない事のあわれさ、あさましさ、豊かな心、思いやりのある心など、戦時下では、つまり極限の時には、親も子もなくなるのでしよう。他人ならさめた目で見える事も出来るのでしようけれど、それが肉親となるとなんとも耐えられない思いでした。

たとえば配給のたばこ、売ればお金の野菜などに交換出来るのですが（男女共に配給があつた）、喫まない分を男の人等が喫む事になるのです。つまりたばこを喫まない人の分だけ食べものが少なくなる事などで、いろいろな事がかさなって、なんにも持たない嫁、つまり他人に対して、なんとも気持ちの整理が出来なくなるのでしよう。同居させてもらっている側は、あと何日と短い日々と割り切っているのに。また、主人の兄嫁が満洲より冬期に二人の男の子（零歳、一歳）を、一人を夏服の上に背おい、ねんねこを背で

引き上げて来たのです。この時姑は「近所にかっこう悪うて」と言われました。なんとも返す言葉もありませんでした。満洲では政府高官で、何人ものお手伝いさんが居る生活だったので。

この様に戦争は人の心を曲げてしまします。もし日本で戦争があるとしても、広島、長崎以上の大型原爆が落とされ、あつと言う間かもしれないが……。死ななくてもよい人が沢山死に、家族の生活はめちゃくちゃになり、一生懸命大切にしている家や、品々が無くなってしまいます。そうして人々の心のすさみ様はなんとも耐えられないものになるのです。また、一部の人達だけが、豊かな生活が出来ると言う事になります。どんな事があつても戦争（武器を持つての）だけはみんなの力で起こさない様にしなくては、と思っています。

つらかつた疎開  
先でのこと

高武多香子  
(新全岡支部)



うす暗い農家の納屋の天井を見ながら、私は天井にわたっている木を毎晩数える

のです。「おばあちゃん、木が十五本あつたら家は建てられるの？」五才になるかならない私はいつも祖母にそうたずねました。

家が欲しい。お祖父ちゃんとお祖母ちゃんとお父さんとお母さんと、私と弟と六人が一緒に住める家が欲しい……。これが私の記憶にある最初のページなのです。大阪で大家食堂をしていた私達が、祖父母や両親の田舎に疎開したのは、昭和二十年三月二十七日。母と私と弟が帰つて、その後五月に祖父母が帰つて来ました。祖父と母の実家である田舎は、水一滴、味噌一つにも気がねしながらの日々でした。従弟達とけんかをすると、水かえせぬおれの家だからかえせぬ。そう奴隷られて、一つ下の弟の手をひいてにげて帰つたのを思い出します。小学校へ入学する前に、祖父母と私、両親と弟、別れ別れに住んだ事もありました。幼い私はこの道を歩いていても、この鉄橋を通るとどこへ行けるのだろうか、そう思いながら歩いたものです。両親の住んでいた所の近くに、七月になると金魚市という夏祭りがありました。私はそこへ行きたたくつて、四ッ貝の道を一人で歩いて帰つたそうですが、子供心に家族一緒に住む事を望んだのは無理からぬ事だと思ひます。

祖父母や母は大阪に住んでいた頃、空襲になると防空こうへ入った時、弟が決まって「おしっこおしっこ」というので大変困つたとか。田舎へ帰るのも瀬戸内海に機雷がぶかぶか浮いているので、無事に帰れるだろうか、泣いて別れた話等はよく聞きました。

新幹線で乗りつくと、高松まで三時間余り、今の世の中で戦争の時の苦しみや恐ろしさは、少しづつ忘れ去られようとしています。この世の中にまだ食べる物も食べられない人、戦争の苦しみの中にいる人達を思うと、何不自由のない子供達に、物の大切さと平和に過ごす事の感謝を、お互いに教える事は大切ではないでしようか。

忘れえぬこと

日野陽子  
(北野田支部)



◆サイレンの響き

今日壬子学校二行ケルノ八兵隊サンノオ陰デス」と、ボール紙製のランドセルを背負つて、胸ふくらませて国民学校一年生になつたのが昭和十九年でした。校庭では、高等科のお姉さん達が掛け声も勇しく、白はち巻で薙刀の猛げいこをし

ていました。「欲シガリマセン勝ツマデハ」を合言葉に一致団結して儉約に努めました。そうしたみんなの努力とは裏腹に、「警戒警報発令ノ空襲警報発令ノ」サイレンの鳴る日が多くなって行きました。学校では避難訓練が繰り返えされました。

年が明けると、近くのお寺や教会に集団疎開の子供たちがきました。「疎開の人達は、両親と離れて辛い思いをされているのだから仲良く、親切にしてあげなさい」先生に言われたとおりに、友達になりたかったのですが、疎開の子等はいつも規律正しく集団行動をとっていて、ついにその機会は与えられませんでした。学校も、午前中は疎開組、午後は地元組と、二部授業になりました。疎開組の登下校は、いつも勇しい軍歌で歩調が取られていました。みんな大声で歌うことで寂しさを紛らわしていたのかも知れません。「疎開の先生は、自分の子にだけええもん食べさせて、みんなには、ロクなもん食べさせへんねんで」誰かが言ったことを真に受けて、まるで疎開児童のような気になって、子連れの疎開の先生を、ひどく憎んだりしたものでした。

B 29が頭上を行ききするようになって、よもやと思っていた近くの軍需工場（現在の富士車輛）にも爆弾が投下されました。

た。河内長野では、通行人が艦載機の機銃掃射で殺されたと聞きました。ついに登下校も危険になって、部落ごとに分かれて、お寺や青年会場で勉強しなければならなくなりました。高等科のお兄さんやお姉さんが、よく勉強を見てはくれませんが、先生が時々しか見にくられないのを良いことにして、みんなでずいぶん騒いだものでした。でも、いったんサイレンが鳴り出すと、みんな血相変えて一目散に家に帰るのでした。

神戸・大阪・堺の上空襲も、夜空に火花を観ているような——その下に練り広げられた火炎地獄図は想像もつかず、ただ、うつとりと眺めていました。夏休みがきて、あつけない戦争は終わりました。大人達の落胆ぶりは心配でしたが、私には悪魔のようなサイレンの音から解放された喜びは、例えようもない程、大きかったです。

#### ◆カラスの鳴き声

小三の夏休み（終戦の翌年）は、父母の郷里（香川県）で過ごした。何のことはない、食べ盛りの私を、ひと夏田舎に預けて、我が家の食糧難を少しでも柔らげようというのであった。

父に連れられて小さな貨物船で海を渡った。船は満杯の積荷で、人はそのすき間であえいでいた。高松桟橋に着いたの

は真夜中。消灯した構内は初発の電車を待つ人と荷物で足の踏み場も無い有様だった。仕方なく外に出て軒下に新聞紙を敷いて座ると、蚊がいつせいに群がりついて仮眠どころではなかった。その上、闇の中から次ぎつぎに浮浪児が現われて、空き缶をぬつーと突き出して、食べ物にくれとせがむ、父が何も食べ物を持っていないと断つてもなかなか立ち去らず、恐くて彼等の気の毒な境遇を思いやる余裕は無かった。夜明けと共に目の前に浮び上ってきたのは、見渡す限り廃墟と化した高松の町であった。つる不安をおさえて、ようやくたどりついた父母の郷里は、変わりなく健在だった。「国敗れて山河有り」と父は言った。

翌朝、祖母が「早ようから裏山でカラスが騒ぎよつたけん、よう眠れんじやつたら、どうもカラス鳴きが悪いけに、誰か死んだんだるか？」と言う。「そんな迷信やよ」と私は笑ったのだが、間もなく裏山の池に身投げ死体が上ったと知らせが入ったのは、声も出ない程の驚きだった。遺体引き上げを見てきた父の話から、死体は母子三人で、下の子を背負い、上の子とは縄で互いの体を結んであったそう。立ち合った人は、その姿があまりに哀れで、みな、もらい泣きしたと言う。上の子が丁度、私ぐらいだったと聞いて、祖母も私も涙があふれて止



昭和20年8月6日広島に投下された原爆のキノコ雲

まらなかった。死んだ人の亭主は、元は漁師で戦地からまだ復員しておらず、二人の子供を抱えて食うに困り、つい農家の畠から南瓜を盗ったのを見とがめられたの自殺だったと言う。

弘法大師にゆかりが深く、仏心の厚いことを誇りにしていた父母の郷里、百姓と漁師が相半ばして、互いに助け合っ暮しを立ててきたこの村にも、敗戦の傷跡は深く残っていたのだ。

誰でも、悲しい思い出は早く忘れたいと願うが、三十余年を経た今になっても、カラスの鳴き声を耳にすると、きのうの事のように鮮やかに、当時の情景がよみがえるのはどうしてだろうか……。

#### 父をうばった原 子爆弾

広江 範子  
（東大阪支部）



昭和二十年八月六日、午前八時十五分、「ピカッ」天地を焼きつくす様な稲妻が走った。髪の毛が逆立ち、地に有る物は、天に舞い上がり、家の中は、襖が、畳が、全てが、天井にはりついて、数秒、いや、数分停止したかの様であった。ワーワー、キヤーキヤー。水を、誰か、助けて、

助けて。呻きとも叫びとも分らぬ大勢の声が、あちこちで、ノタウツテいる。一瞬にして、町は、修羅場と化していた。年寄り、子供、女、青年の見境も出来ぬ程、髪の毛は勿論、裸で、皮膚はやけただれ、指は一つに固まり、水を、水をと、誰云うでもなく、ただ、水を求めて、人の流れは川に向かっていた。川は、すでに人の波、多勢の人が死体となり、それをかき分け、我れ先にと水につかった。そして、死んでいった。

当時、私は、一歳十カ月、勿論、この情景を知る由もない。祖母や、母や、近所の人達から聞かされた私である。

父は、広島市にある指令部に職業軍人として勤務していた。体格が良く、制服のよく似合った父を、とある人が、こう話しをしてくれた。「薫(クン)さんは、毎朝、この道を通つとつた。カチャ、カチャ、サーベルの音がしてのー。近所の者は、皆、外に出て、薫さんを見送つたものじゃった。立派な姿で、ホレボレして、皆、薫さんにホレとつた。じゃがの、薫さんが家に来ると、ドキッとして、とうとう召集令状が来たか、と、思うてのー」父は召集令状を発行する役にあつたそうです。

その日、ガラスの破片を身体中に浴び、地に埋もれかけていた所を、見知らぬ娘さんに助けられ、毛布を掛けてくれたそ

うです。父は、両足切断。器具もなく、薬も不足の当時は、ノコギリでの切断、赤チンでの治療、治療する訳もなく、父は、明日は退院との、死の宣告を受け、明日は寝れるからと、一眠りついたまま帰る事ない人となったと聞く。

当時、母二十三歳。母は、まだ形も定まらぬ弟を身こもっており、死の灰を浴びての今日、弟と共に、原爆手帳を頼りに、怯えながらも、まだ元気に働いている事が、私にとって何よりの喜びです。父の顔も肩の広さも、胸の厚さも手の温もりも、父の臭いも何も知らない私です。あれから三十四年の月日が流れ、今の日本では戦争も幻になりつつある。娘に尋ねてみる、「戦争、知ってる？」娘は、「知らない、どうして、戦争をしたの？」そう、どうして戦争なんかしたんだろう。「お母さんも、知りたい」。



被爆直後の広島市

〔広島・長崎への原爆投下〕  
昭和二十年八月六日午前八時十五分、

航海中も船底にいた数人の人が亡くなり、その都度遺体は海面に投げられ、汽笛がもの悲しく鳴り響く。あちこちからすすり泣く声。船は大きく一廻りしてから前進する。もっと速く動いてほしい。もうこれ以上死人が出ませんように……。朝もやに包まれて日本の島が見えた。「ほんざい」「ばんざい」と歓声があがった。三昼夜がかりで博多港に着いた。私達には迎えはなかった。

五丁の原子爆弾一個で、広島市は人も建物も一瞬のうちに吹き飛んだ。三十四万の人口のうち七万八千人が死亡、負傷・行方不明は五万人以上。その時生きのびた被爆者もその後の五年間だけで二千万人以上が死亡。  
二つめの原爆は九日午前十一時すぎ長崎に。二万三千七百五十三人が一度に生命を奪われ、行方不明千九百二十七人、重軽傷約五万人におよんだ。被爆者がたどらされた運命は広島と同じで、その苦しみは今も続いている。

### 満州からの出場 FSDA

走井季子  
(向ヶ丘支部)



昭和十八年、母(二十八歳)長兄(二十歳)次兄(五歳)私(三歳)弟(一歳)の五人で渡満、陸軍省の官舎に住んでいた。そこで二十年八月十五日の終戦のニュースを知った。その時から私達の戦いが始まった。  
兄は出張で留守。数日後に暴動が起った。ソ連兵が私達の家を占領し追い出された。兵士が発砲する中、広いコーリヤン畑に隠れながら逃げ過る。着のみ着の

数日後大阪に着く。大阪は焼け野原。焼け跡を閉塞している人々の中に父を見つけた。姉も元気だった。死を乗り越えての二年ぶりの対面である。感激でいっぱい。毎日親子揃って暮せることはなんと幸せなことでしょう。  
本当に戦争は狂気の沙汰です。その犠牲は、いづくせない程に根は深いのです。長兄は消息不明のまま今日に至っています。横井さんや小野田さんのように一日も早く生還してほしいと願っています。父を、夫を、兄弟を、恋人を戦地へ送り出した人達の気持は、察するに余りあります。その為に根が残り犠牲を強いられている人々が何と多いことでしょう。戦争は残酷です。戦争は絶対にあつてはなりません。どうぞ世界中がお互いに手を握り合い、平和でありますように祈らずにはいられません。

### 東京大空襲を体験して

淡 春代  
(富田林支部)



毎年夾竹桃の花を見ると、なぜか戦の八月がやって来るのだなあーと、あのいまわしい戦時中の思いが頭をかすめ

ままで、私達は何を食べていたのでしよう。おそろく畑のトマトやきゅうりを盗んでいたはずで、大通りは砂ぼこりで、家財道具が散乱。足手まといとなった病人や老人や子供は、取り残されたまま。私は必死で母の後をついていった。せつぱつまれば、血を分けた親子でさえもどうでもよいような気持ちになるのでしょうか。子供を中国人に売り、現金や食物と交換している風景が私の心に焼き着いています。

やっとの思いで、日本集結所に着いた。すでに大勢の人々が折り重なるように集まっていた。大きな風呂敷包みや家財道具を持った人。私たちのように着のみ着のままの者、親とはぐれて泣きわめく子、盗みもひんぱんに起こり、けんかも絶えません。まるで戦場のような様子。一番困ったのが水。半年以上も顔も洗わず、口もすすがず、着のみ着のまま。配給車の来るのが待ちどおしかった。食事は朝夕二回それもほんのおわずか。私達のまわりで、栄養失調や病気でたおれ、人が何人も死んでいく。水、水といながら、特に子供は体力がないので助からずじまい、本当に悲惨です。

二十一年四月最後の移動、五月やつと胡盧島より第一便の引揚船に乗り込む。母はその頃から弱り出した。船底にいた私達を特別室に移してくれてほっとした。

私は東京の隅田川のほとりで生まれた。けたたましいサイレンの音と、B29の不気味な爆音、こんな毎日の明け暮れだった。忘れもしない昭和二十年三月の東京大空襲(当時十歳)死なずに生きられたのが不思議に思うくらい悲惨な状態だった。悲惨という二文字を戦争を知らない子供たちに、どう説明してよいのか私自身まどう。幼なじみも、学校の友達も消息はわからない。そして広島・長崎の原爆投下、八月十五日の敗戦、どの人もどの人も、口々に「こんな悲惨な戦争はいやだ、もうせつないにしてはならない」と重くつぶやく。とめどなく溢泣いた。成人するにつれ、これほどに悲惨な戦争を人間はどうして、しなければならなかったのか。こんなにも空しい戦争をどうして……。

今は結構な良い時代になって、あの頃は食べる物さえなかったというだけでなく、戦時中の貧しさの原因はなんだったのか、歴史的な視点で探って見る必要があると思うのです。歳月の流れとともに地獄さながらのあの悲惨な戦争は、せつないにしてはならないという叫びが、消されることのないように、あの戦いからも、原爆からも、いわば偶然に生きのびた私どもは、次の世代の人たちに伝えて行く義務があるように思うのです。

一人ひとりの幸せが世界の平和の土台の上にあることを思うとき、子供たちの未来のために、かけがえのない地球と人類の平和を守る愛に燃えるものであってほしいと、おとなたちは伝えて行きたい。

### 父・文机・ジャガイモ

岡野弘子  
(東大阪支部)



第二次世界大戦の最中、昭和十七年三月、八尾空港にほど近い町(当時は村であった)で私は生まれた。私が生まれた時すでに父は出征しており、母と私二人のわびしい家庭であった。

朝晩、タンスの上に飾られた父の写真に合掌する毎日、夏にはさつま芋のつるを食べ、秋には近くの田んぼでイナゴを採り、足だけちぎりフライパンでいって飢をしのいだ日々。この様な暮りでも私がまだ幼なかつたので、他の家庭に比べればはるかに恵まれていたのだと母は云う。常食はジャガイモ、そのせいか今でも私はジャガイモが好物、いくら食べるとの飽きないのが不思議な気がしてならない。近くの農家の子供がカキモチをお

やつに食べているのを私がほしがり、それをなだめる事がつらかつたと母はよく話してくれた。

終戦ま近い昭和二十年、大阪の市内の空が真紅に染まり、家財道具を荷車に積み田舎へ引き揚げる人々の群が、奈良街道(現在の国道二十五号線)を夜明け近くまでうめつくした様は、幼い私の目に今でもはっきり焼き付いている。その群衆の中に母の知人がおり、その時だけいた文机が私の勉強机として長く私共の家に残されていた。

そして長かつた戦争も終つたある日、進駐軍が私達の町へやつて来て町の子供達にたくさんチョコレートやキャンデーをプレゼントしてくれた。しかしながら大人達はそれらには毒薬が入っているかもしれない、などと云ってすべて捨ててしまったのである。今考えるとまことにナンセンスな話である。

数年後、それは本当に突然、朝まだ早い夏のある日、近所の小母さんが動転した様子で私を床から引き起こし、何もいわずに小母さんの家へ連れて行かれた。そこには母も半ばあきらめていた父が、大きなリュックサックを持って座っていたのでした。父は帰国後も再三マラリアの病魔と戦つた。父はお酒が入ると得意になつて戦地の話を語ってくれた。ジャングルでの生活、ニシキヘビやトラの肉

を食べた事、マンゴ、パイア、ドリアンといった熱帯の果物の話など……。その父も先年この世を去り、今はきつと私達の幸福を祈っていてくれていることでしょう。

### 戦争は終つてはいない

山川清美  
(北野田支部)



戦争、空襲、この言葉を聞くたびに身震いしたくなる私。でも戦争を知らない人たちに私なりに伝えてみようと思ひ、ここに書いてみます。

空襲の激しい昭和二十年三月頃から終戦の時期にかけて、私は小学一年生でした。でも一年生とは名だけの事、入学式もなく、また楽しみにしていた学校にも一歩も入らず、ずっとお休みの一学期でした。

私の家は大阪堂島で、六月十五日の空襲で全焼してしまいました。一つの爆弾

で家も財産も町の大部分が灰となつてしまいました。毎日毎晩休むこともなく攻めてくる敵機に、ゆつくり眠ることも出来ず、爆弾が雨のように落ちる中をあちらこちらと避難したのです。大人たちがいつも、「明日はもうどうなっているか判らない」と話しているのを聞いたたびに、「子供ながらに身がすぐむ思ひでした。あの頃の話といえは、どこその防空ごうで多くの人が座つたまま死んでいくとか、市電に爆弾が落ちて全員焼けてしまつたとか、家から一歩外に出たところを頭に爆弾の束を受けたとか、思ひ出すたびに「むごい」の一語につきるのです。

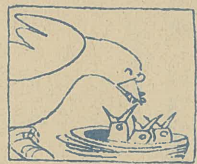
現在あの賑やかな梅田付近も、あの頃は全部、焼野が原で、大きな樽を住居として居る人、焼跡に裸同然の姿でじつと座りこんでいる人などをよくみかけました。幸いにも私たち一家はけが一つせず、又近くに伯父の会社が焼け残りしたものですから、一時はそこに身を寄せせることも出来ました。また私にとつて今でも忘れられないことは、三日間もくすぶり続けた焼跡から、せともの「ままごと道具」が色こそ白っぽくなつてしましたが、われもしないで出てきた時です。うれしくて何回も握りしめました。

さて疎開となりますと(兵庫県相原に行つた)汽車の切符がすぐにとれず、押しあいのガタガタの汽車で苦勞して行き

ました。母などは少しの助かつた荷物を運ぶのに大阪―柏原間で何度か敵機に襲われ、汽車から降ろされ、大きな荷物を背負つて駅に逃げこんだり、追い出されてまた線路を走つて逃げたりしたとのことでした。疎開先では大阪の時以上に食料には不自由しました。でも私には空襲もなく、敵機襲もなくゆつくり眠れることをとても嬉しく思つたものです。

### 特攻隊の飛び立つ飛行場で

竹田喜美子  
(阪南支部)



もう三十年以上も昔の事なので記憶も定かでないが、私の居た「米子地方航空機乗員養成所」がグラマン戦闘機の機銃掃射を受けたのは、昭和二十年の、雲雀がさえずり、麦が青々と伸びていた頃であつた。

丁度私は事務所から歩いて五分以上もかかる炊事場で用事を終えて出た所であ

つた。そこは裏門がすぐ傍にあつて、納入業者が出入する為に、門は何時でも開いていたので飛び出し、松林の一本の松に身を寄せた。飛行機が旋回して来る度に、眼鏡をかけて機銃掃射をしている操縦士の顔が、はつきりと上半身を出して目の上を通過するのを見ながら、松をぐるぐる廻つていた。私を狙つていたのではないのに、あたかも自分が狙われているように見えて、生きた心地がしなかつた。すぐ隣の木に流れ弾が不気味な音をたてて枝を裂く。あまり長い時間ではなかつたであろうに、その間の長かつた事。やがて飛行機は日本海の彼方に消え去つて行つた。

震える足で本部に帰つて見ると、廊下はまるでガラスの絨緞を敷いたかのようになり、両側の窓ガラスは全部割れ落ちていた。爆弾も落としたのか前庭のあちこちに大小様々の穴が出来ていた。格納庫で働いていた人達は「直接狙われたが飛行場の芝生に腹這いになつたまま、身動きも出来なかつた。弾が横に一直線に土を蹴つてとんで来たが、なかなか当らぬものだ」と言っているのを後で聞いた。伯耆大山と云うよい目標があるので、大山を崩してしまえばいいのに、とよく思つたものである。

もうその頃は燃料不足の為に送迎用のバスも廃止になり、一里半の野道を歩い



て通勤していたので、帰る途中、「また空襲になったら此の麦畑に隠れよう」等と思ひ、ひやひやししながら人家のある町まで辿り着くと、人々は空襲のあった事など知らぬかのように、皆のんびりと配給物を買う長蛇の行列を作っていた。やつと家に帰ると、父母は北の空に飛行場を爆撃する様子がよく見えたそうで、大変心配していた。

それからすぐ閉鎖になり、終戦を聴い

## 母と短歌

石橋理子

(高石支部)



私の父は昭和十九年三月出征、二十年五月戦死。その年の夏、おそらく終戦を告げた八月十六日前後に母が作った歌  
天地(あめつち)にただひとりなる吾  
子(こ)が父は御骨(みこつ)となりて我手(わがて)に  
かろし

この歌が三十四年経て日の目を見、講談社発行の「昭和万葉集」に出る。嬉しかったのか娘の私に見せてくれた。

ふりかえれば四十年余りの短歌生活で、

たのは残務整理の事務所であった。その時上司が男泣きされたのが今も目に浮かぶ、まるで昨日の事のように。また、此の飛行場からは当時、毎日のように特攻隊が飛び立って行ったのである。残る人達が正門の両側にずらり並び、その中をしつかりと白いマフラーに身を固めて飛行場に向う隊員を敬礼を以て何時までも見送った姿を、今思い出しても涙が出そうになる私である。

母にとってこれほどつらく悲しい歌はないのである。結婚生活三年で最愛の夫を亡くし、姑に三十年つかえ、私を育てることに全てをかけ必死に生きてきたのである。その間、都会育ちの母が田舎にひきこもり、子供の成長をただひたすら願ひ、おそらく自分の心の支えは短歌であったと思う。この歌以後のひもとけば、私の成長の歴史でもある。今は老後をひとり、歌と絵を習って寂しいながらも自分の心の中を見つめて暮している。

素晴らしい師に出会い、ある結社に属し四十年も持続すれば、これほど自分の生きがいを求め充実した日々はないだろう。金銭的に苦しい生活をして心の中に豊かさがあるという事は、人間を本当に強くするものだとしみじみ思う今日この頃

である。  
今年の歌会始めに「丘」という勅題に出品した。「広島島の丘に若草萌ゆる日も友は原爆の疵癒(きずいや)しあむ」という歌である。規定が細かくあって、母は、生年月日が抜けておりましたと官内庁から通達がありくやしがることしきり。「もしかしたら歌会始めに出られたかもしれないのに……」そんな母にぜひ歌集を出してあげて、一日でも長く元気に生きてもらわねばと願いをこめてペンを走らせました。

### 「特集」発行にあたって



はじめの企画として、戦争体験記を募集いたしましたところ、さっそく、十七編の手記が寄せられました。ご協力にたいし、心より御礼を申し上げます。  
「戦争つてなあに？」と問いかけるお子様に、「私も知りたい」と述べておられる悲痛な声。この叫びは「いのちとくらし」を守る運動の大前提である「平和」の問題に、きびしく迫る崇高な問いかけであり、私達婦人こそ、真の平和を願ひ、守り育て、要求できる力づよい母体であると思ひます。  
精一杯守り通してきた三十四年間の平和を、日本国憲法が明示する「恒久的なもの」とするために共に学び、語り継ぎ、愛する子孫に伝えていきたいものです。

機関紙委員会

ハンチで穴をあけ、として使ってください。

●いつまでも大切に保存しておいてください。